

第 43 回 2017 年 9 月 27 日(水)

ゲスト 齊加尚代 毎日放送報道局ディレクター

テーマ 取材を通して見た沖縄の昨今

(2017 年日本民間放送連盟賞受賞作品)

『映像'17 沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔』上映)

主な内容

- ◎ 「土人発言」がきっかけ 沖縄の基地反対運動を記録
- ◎ MX「ニュース女子」問題にも焦点
- ◎ ネットのフェイクニュースを検証～各映像コンクールで評価～
- ◎ MX「ニュース女子」制作の背景
- ◎ “検証する内容なし” 批判受け MX が「報道特別番組」放送
- ◎ 若者と沖縄基地反対運動
- ◎ 膨れ上がるネット空間 既存メディアの対応
- ◎ ネット空間の出来事 沖縄の高齢者ほぼ関心なし
- ◎ ドキュメンタリー番組で“ファクト”を決めるのは誰か
- ◎ 地道なドキュメンタリー制作 存在意義大きい
- ◎ ネットの“言論”空間 その影響力広がる

司会 今日ゲストは、毎日放送報道局の齊加尚代さんです。
前回〈関西テレビのテレビドラマ・プロデューサー〉に引き続き、現役の放送人をお招きしました。
沖縄の基地反対運動を新しい視点で記録したドキュメンタリー『映像’17 沖縄さまよう木霊～基地反対運動の素顔』を制作したディレクターです。
齊加さんとお会いするのはおよそ30年ぶりで、非常にうれしく且つ懐かしいなと思っております。
実は私、1990年大阪市鶴見区で開催された「国際花と緑の博覧会」の担当記者として長期間(4月～9月)常駐しており、プレスセンターでは、私の局と毎日放送のブース(記者室)が隣同士でした。ブースはプレハブで、壁はあるんですが、上部が空いているので、隣の毎日放送のブースから話し声がよく聞こえてきました。大変元気なお嬢さんが来られまして、ところで齊加さんはあのときが初めての記者クラブでしたか。

齊加氏 最初は市政クラブで、二つ目のクラブだったと思います。

司会 非常に元気で、バリバリで男性記者と丁々発止と渡り合っていました。

齊加氏 当時、キャップと時々けんかしていましたね。

司会 というような記憶があります。インドネシア語、マレー語でチャンティックというのは、可愛いという意味があって、そういったことで話題になりました。
私は2002年から2009年まで大阪センチュリー交響楽団に出向していて(事務局長として)運営補助金などの問題で当時の橋下徹知事と難しい交渉をする立場にありました。
その後、記者会見の場で齊加記者は当時、大阪市長だった橋下氏といろいろ話題になるような丁々発止があったようですね。橋下氏の本質を見抜いた記者がいるんだなと大変心強く思った記憶があります。
今回は、ご案内の通り、まず制作された作品を見ていただきます。
2017年1月29日に放送されて、大変話題になりました『映像’17 沖縄さまよう木霊～基地反対運動の素顔』です。この作品は今年度(2017年)の日本民間放送連盟賞テレビ報道番組部門で優秀賞を受賞したほか、日本放送文化大賞では地区審査を通過し、中央でグランプリ候補作にノミネートされています。また「地方の時代」映像祭で優秀賞10作品の中に選ばれています。グランプリ作品は11月11日に決定、公表されることになっています。
それではひと言ご挨拶をいただきます。

<「土人発言」がきっかけ 沖縄の基地反対運動を記録>

齊加氏 毎日放送報道局の番組部 齊加尚代と申します。よろしくお願いいたします。

私は今ご紹介にありましたように報道記者としてさまざまな記者クラブに所属し、ニュース現場で取材を重ねてきました。一昨年 2015 年の夏にドキュメンタリーを専門に制作する番組部に異動になり、最初に作ったのが『映像' 15 なぜペンをとるのか〜沖縄の新聞記者たち〜』（2015 年 9 月放送）という沖縄の琉球新報社に 40 日間密着取材して完成した作品です（第 59 回 JCJ「日本ジャーナリスト会議」賞受賞）。

この作品を作ろうと思ったのは、大阪出身の作家百田尚樹さんが自民党議員の勉強会（が終わったあと）で「沖縄の二つの新聞(琉球新報と沖縄タイムス)をつぶさなあかん」という風に発言した、まさにメディアバッシングが起きたことがきっかけです。そのバッシングされた沖縄の記者たちが日々どういう思いで紙面に向き合い、活動をしているのか。そのことを視聴者に伝えたいということで取材を始めました。

取材記者として初めて沖縄に入ったのは一昨年の夏で、その時、名護市辺野古の米軍基地建設現場のゲート前にも行って、沖縄の基地反対運動が今どのような状況にあるかということは、この目で見てある程度理解していました。そして昨年夏、オスプレイの離着陸用ヘリポート「ヘリパッド」の建設が東村・高江（那覇から車で 3 時間ぐらいかかる）で工事が強行されることになって、その高江の現場で機動隊と現地の反対住民がぶつかり合っているということも知っていました。私はその時点で関西を拠点にしている取材者なので、沖縄に入るということは想定していませんでしたが、昨年(2016 年)10 月 18 日、大阪府警の機動隊員がその抗議活動中の住民に対して「ボケ、土人が---」（大阪弁）という暴言を吐いたことに衝撃を受けました。そして、その後の政治家たち、例えば大阪府の松井知事の「そもそも混乱を引き起こしているのはどちらなんですか」とか「確かに機動隊員の不適切な発言はあったけれども、そこまでメディアが攻撃するのはどうか」という発言があり、いわば「土人発言」をメディア批判に置き換える形で擁護するような空気が広がってきたことにショックを受けました。局にも「メディアが悪い」とか、「偏向報道だ」とか、また「基地反対派の活動家がひどいのは分かっているじゃないか。インターネットで伝えていたので調べよ」そんな視聴者のメールとか、電話が殺到するような状況になり、それが当社に寄せられた視聴者の意見の 7、8 割にも達しているということを知ったのです。

そこで何とか沖縄に入って、この状況を自分なりに記録したいという思いにかられました。当時制作中の「生活保護」をテーマにした番組をいったん中断して、その「土人発言」をきっかけに沖縄に入ったというのが、この番組が生まれた経緯な

んです。

<MX「ニュース女子」問題にも焦点>

年が明けて2017年1月末の放送をめざして準備していたところ、1月2日、東京のローカル局「東京メトロポリタンテレビジョン」（通称「TOKYO MX」）が「ニュース女子」というバラエティー番組で沖縄の基地反対運動を非常にゆがめた形で放送したのです。私から見れば、きちんと当事者取材をせずに単に取材したふりをして報じたという内容でした。

この「ニュース女子」の問題も取り上げたいと思い、同業者が報じた番組をどう扱うべきか、当社のコンプライアンス室長と番組プロデューサーとも相談した結果（了承を求め）、番組（「沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔」）の後半に組み入れることにしました。

番組の放送後、当初は厳しい批判やバッシングがあるんじゃないかと覚悟をしていたんですが、結果的にはそういうことは、一切なくて内容を支持するとか、番組を見て沖縄の基地反対運動の素顔が分かったという感想がたくさん寄せられました。「土人発言」後に寄せられた当社への感想と「沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔」の放送後に寄せられたそれとは全く違ったものであったということが今でも非常に印象深く残っています。

それでは、ご覧ください。

作品 上映

『映像'17』 「沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔～」（約55分）
（2017年1月29日放送）

上記の番組は、沖縄北部の米軍基地建設に反対する地元住民の日常を現場に入って丹念に記録。さらに、もう一つの“現場”とも言えるインターネット上に現れた基地反対運動に関わる噂やゆがめられた情報にも焦点を当て、情報を発信した当事者を粘り強く取材して検証し、その真偽を明らかにしていく。

番組の導入部、夜明け前、鶏の鳴き声が聞こえるやんばるの森にある畑で主人公の一人儀保さんが、ヘッドライトを付けて農作業をしている。儀保さんは野菜を収穫したあと、米軍の北部訓練場（東村・高江）のゲート前に行く。新しいヘリパッド建設に反対する抗議活動に参加するためだ。工事が始まった10年前から座り込みを続けている。

番組では、ゲート前で建設阻止を訴え座り込みを続ける地元住民とそれを強制的に排除しようとする機動隊、そして砂利を積んだダンプカーが何十台もパトカーに先導されてゲート奥に消えていく姿を追っている。

中盤から、機動隊員の「土人発言」問題、インターネット上に現れた沖縄基地反対運動にかかわる風説、さらに東京ローカルの地上波テレビが「沖縄」を特集し、「事実の裏付けが不十分」だと批判された「ニュース女子」(MX)問題を焦点に、それぞれ丹念に検証し、真実とは、事実とは何かを追求していく。

<ネットのフェイクニュースを検証～各映像コンクールで評価～>

こういった取材姿勢に対して、フリージャーナリストの金平茂紀氏(TBS系「報道特集」キャスター)は「トゥルース(真実)とファクト(事実)に忠実に取材を進めるとはどのような行為をいうのか。この番組がそれを私たちに教えてくれている」と評している。

雑誌『ジャーナリズム』(2017年3月)

「沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔」は、2017年日本民間放送連盟賞優秀賞並びに、第54回ギャラクシー賞奨励賞を受賞、「地方の時代」映像祭でも入選作品として選ばれている(入選10作品の中からグランプリ作品決定)。

講評の一部を紹介。

2017年日本民間放送連盟賞・テレビ報道番組部門優秀賞 講評(民放連表彰番組・実績)

2016年10月、沖縄北部の東村・高江地区で新しい米軍施設の建設が進められ、現地で座り込みの反対運動を続ける人たちを「暴力集団」と非難中傷する言説がインターネット上に溢れ、それを既存のメディアが拡散させた。番組では、沖縄に漂うさまざまな事実を追うため現地で直接取材し、事実とは何かを追求した。

当事者たちの声を伝え、ネット上のデマやフェイクニュースを検証したことは、ジャーナリズムの自浄能力を高めるものである。

第54回ギャラクシー賞奨励賞受賞 講評『GALAC』

沖縄の基地反対運動にかかわる地元の人々が、ネット空間で「極左」「過激派」とされて拡散し、そうした一方的な情報をもとにテレビ番組まで作られてしまう現代社会の危うさを、ジャーナリズムの観点から自戒を込めて描いた。基地の是非以前の問題として「事実」が歪められる社会状況に焦点を当てたタイムリーな作。

【注】テレビ番組とは、TOKYO MX で放送された「ニュース女子」

(作品の上映が終わったあと 質疑)

司会 ご覧いただいた皆さま方はさまざまな感想をお持ちだと思います。
事実を事実として放送することだけでなく、それ以外のものとも闘わなければならないといった非常に複雑な時代になってきたのではないかと。
斉加さん、最初にお話しいただきましたが、何か付け加えることはありませんか。
それからこれは、前作『なぜペンをとるのか～沖縄の新聞記者たち～』の続編というか、気持ちのうえではそういった位置付けの作品になるのでしょうか。

<MX「ニュース女子」制作の背景>

斉加氏 この番組の放送後に MX の「ニュース女子」に関して動きがありましたのでご説明いたします。

番組の制作段階で、私にはインターネット上の事実でない風説、言説を取り混ぜたと見える TOKYO MX の「ニュース女子」という番組について、MX 側に取材を申し込んだのですが、応じていただけなくて、放送後、2017年2月末に「当社見解」(MK) が出ました。

「ニュース女子」は、DHC という化粧品と健康食品を販売する企業の「持ち込み」番組で、DHC が子会社の番組制作会社 DHC シアター(現在 DH テレビジョンと名称変更)と連携して番組を作り上げ、MX に持ち込み放送する仕組みになっています。従って番組自体の放送枠が買い取られている状況になっています。もちろん放送に際しては番組を考査する必要があり、MX 側は考査したと公表していますが、私が取材した限りでは、年末年始にかかり、きちっとした考査がなされていなかったのではないかと聞き及んでいます。

その後、「当社見解」という形で中身には問題がなかった(「事実関係において捏造、虚偽があったとは認められず…」)、ただし「誤解を生じさせる余地のある表現があったことは否めず、当社として遺憾と考えております」との見解を公表しています。

「ニュース女子」について、BPO(放送倫理・番組向上機構)の放送倫理検証委員会と人権委員会は「事実についての裏付けが十分であったのかなどを検証する必要がある」として現在、審議を続けています。

司会 たまたま、今日(9月27日)の新聞で報じているんですが、沖縄の米軍基地反対運動を特集した「ニュース女子」が「事実の裏付けが不十分」などと批判された問題で、「TOKYO MX」は9月30日夜、現地を再取材した報道特別番組を放送すると発表。ただしこの番組は関東地方のみの放送になるようですが、「エムキャス」

サービスを使えばパソコンやスマートフォンで見ることができると伝えています。

< “検証する内容なし” 批判受けMXが「報道特別番組」放送 >

齊加氏 (MXの) 番組審議会はもちろんこの「ニュース女子」について、問題が多いという意見を述べていて、検証番組を作るように意見を出していたんですが、今月30日に放送される特別番組は、検証番組というよりむしろ、沖縄において再取材した番組という位置付けで、「ニュース女子」の中身をMXが独自にきちんと検証したものではないのだろうと思います。

なぜそういうことになっているのかというと、DHCという企業は大スポンサーで、DHCの意向が(MXの)経営にも影響力を持っているという状況です。MX自身にはもちろん労働組合もあって、報道局もあって報道記者もいて、報道経験者の幹部もいると思うんですが、内部から声が上がっていかないようです。

「ニュース女子」についてももう少し触れると、私自身「ニュース女子」の番組をインターネットで見たときは、大阪府警の「土人発言」以上に衝撃を受けました。何故なら基地反対運動に携わっている高齢者を嘲笑っている、見下して、茶化しているという風を感じたからです。例えば「デモで逮捕されても生活に影響のない武闘派集団シルバー部隊」というような表現で紹介しているのです。リポーターも辺野古の基地の前をタクシーで横切るだけで、ゲート前に立つことも、当事者のお年寄りやそこに集まっている人たちから話を聞くこともなく、彼らを基地反対派の「連中」という言葉で一括りにしているのです。

ところでドキュメンタリー「映像’シリーズ」は1980年の4月11日に1回目の放送をしているんですが、その1回目のディレクターがまさにここにいらっしゃる貝谷さんです。その1回目の番組『6歳未満～沖縄・戦災被害者の証言』では、戦争をくぐり抜けた当時30代の子育て中のお母さんたちの貴重な証言を撮っています。目の前で家族を亡くしたうえに自身も腕や足もしくは、目を失ったという証言を丹念に追ったドキュメンタリーです。そういう方たちと同世代の人が今高江であったり、辺野古であったり、そのゲート前でもうこれ以上ヘリコプター離着陸用の新しいヘリパッドを造らないでくれと座り込んでいるんです。

実際に座り込みをしている高齢者の話によると、機動隊の非常に乱暴な排除のせいで頭から血が出て、救急車で運ばれたり、けがをして入院した人もいるということです。年金からバス代、車代をひねり出してここに来る。毎日は来られないけれども週2回は必ず来るといふ人もいました。いわば体も生活もけずって、自分たちの子や孫のために、何とか基地反対を訴え、新しい基地を造らせないという思いで必死にそこに座り込んでいる彼らを侮辱したり、茶化したりすることは放送人としてもそれはいかなものかと思いました。

<若者と沖縄基地反対運動>

一月ほど前に、MXの「ニュース女子」とMBSの「沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔」とを同時に見る会というのがあり、そこには沖縄のことをよく知らない大学生も何人か参加していました。大学生がMXの「ニュース女子」を見た時に「面白い」と言ったんです。確かに（「ニュース女子」は）バラエティーの手法で演出して作られているので、笑いをさそうシーンとかがいっぱいあるんですね。その学生は「全然僕たちは知らなかったの、すごく笑っちゃいましたが、隣に座っていた爺ちゃんがもの凄くこわい顔をして見ていたので途中から笑えなくなりました」と率直に語ってくれました。

（「ニュース女子」を見たあと）「沖縄 さまよう木霊～基地反対運動の素顔」の感想を尋ねると、自分の町、自分の家のすぐそばに米軍の基地が来たら、どうしようかと思いましたと語ってくれたんです。

沖縄のことを全く知らない学生が視聴する番組や情報の内容によって、どういう想像力（彼らが見たり聞いたりした）を働かせるか、どんな風に目の前の出来事を受けとめるのか、大きな違いがあるということを感じました。

たまたまなんですが、この番組の放送後に、アメリカのトランプ大統領のさまざまな暴言や大統領にとって都合の悪い情報を流すメディアを集中的に攻撃するようなことがあって、フェイクニュース（偽ニュース）とか、オルタナティブ・ファクト（もう一つの事実）とか、ポストトゥルース（脱真実）といった言葉が一斉に新聞やテレビで流れるようになったんです。

【注】ポストトゥルース(脱真実) 朝日新聞 16 ページ 2017.7.13 付

「真実や事実よりも個人の感情や信念が重視される政治文化の風潮を意味する」

私自身はこの番組の取材を通じて痛切に感じたのは、人は自分にとって心地のよい、楽になる情報に引きずられていくという現象があつて、事実かどうかというよりも、この情報によって気持ちいいよね、例えば沖縄は基地に依存している。沖縄で基地反対運動をしている人は沖縄人じゃない。過激な活動家だ。金のためにやっているんだ。救急車を止めるぐらい暴力的なんだ。こんな風に、同じ日本の中で起きていることだと意識せずにはすむような言説にすごく引きずられていつているんじゃないか。だから見て見ぬふりをしてしまっているんじゃないでしょうか。

<膨れ上がるネット空間 既存メディアの対応>

一方、そういう沖縄の中から、（沖縄）基地反対運動を否定するような言説が生まれている状況もあるんです。その後ろ盾になっているのは、間違いなく本土の人たちなんです。先に触れた大阪出身の人気作家もその一人で、それ以外に今テレビで活躍している何人かのコメンテーターも基地反対運動を弱める、事実とは違うよ

うな言説を流しているという実態があります。

この番組自体は沖縄を舞台にしていますが、フェイクニュースとか、ニセ情報を大量に流していく状況は沖縄に限ったことではありません。メディアがおかれている状況、今私たちが目にしている風景というのは、私もこの(放送)業界に入って30年ぐらいになるんですが、10年前、20年前、30年前とはまるで違ってきているなとすごく危機感を募らせています。インターネット空間というものがどんどん膨れ上がって行って、メディア人の中でも、ネット空間の中での完結した取材だったりして、(ネットで)調べたことをテレビで流すというような状況も生まれています。このいろんな言説、風説、ニセ情報が飛び交う状況をどうしたらいいのか私にもよく分かりません。

やっぱりメディアが立ち向かっていかないと。放送は特に影響力が大きいので、市民、視聴者が求める情報をきっちり出していかなければならないと、気ばかりあせています。

沖縄をよく知る同僚に、広がり続ける砂漠の中で小さなジョウロで水を撒いている気分にならないかと尋ねたら、“なるなる”と言われて、“そうだよね”と相づちを打った次第です。

でも結構、基本は楽観的というんですか、いい意味での鈍感力があるほうなので、現場に立ち続けて、いい番組を作っていきたいと思っています

司会 途中でちょっと触れられましたが、見たくないものは見ない、醜いものは見たくない、本当の姿を見たくないというのは、多分沖縄に限らず、かなり普遍なことだろうと思うんです。齊加さんは今普遍的なところまでお話いただいたと思います。本当の姿がちゃんと伝わっていない、こんな状況の中で沖縄の人はどんな風に思っているのでしょうか。

<ネット空間の出来事 沖縄の高齢者ほぼ関心なし>

齊加氏 ゲート前で座り込んでいる高齢者は、インターネットを一切見ていませんが、インターネットの中で沖縄がそんな風に言われていたのかということに気づいてショックを受けた方がいたと聞きました。ただ「ニュース女子」の番組については地元の新聞「沖縄タイムス」「琉球新報」が何度も記事にしています。しかしその記事を読んだ地元の人是最初、何を書いているのかよく分からなかったと言っています。取材していた東村・高江の仲嶺久美子区長も「沖縄タイムスの記事を読んだが、何を書いているのかよく分からなかった」と話していました。

仲嶺区長は実際、番組を見て「何が事実で、何がデマなのか分からない」という感想を述べていました。

沖縄でも、インターネット空間での出来事というのはほぼ知らない高齢者が多い。

一方、最近読谷村のチビチリガマが荒らされるという事件があったんですが、荒らしたのは沖縄県内に住む十代後半の少年 4 人でした。彼らはチビチリガマで集団自決(住民同士が殺し合うという凄惨な出来事)があった場所だということを知らなかった。だが、あそこが心霊スポットだということを知っていて、肝試しをしようとやってきたと語っているんです。まさにその心霊スポットという情報は間違いなくインターネットから得たものだと思います。

司会 大学生の話がありましたが、見る側、視聴者の受け取り方というか、折角ちゃんとしたものを見ていながら、それ以外のネットのさまざまな情報によって、ゆがめられた方向へ流れてしまう。結果として間違った情報が流れてしまうということに対して、番組を作る側としては非常に困ったものだけというだけでなく、この風潮を何とかしたいというお考えはあるでしょうね。

齊加氏 昨年(2016年)11月3日にあった大阪府警機動隊員を擁護するデモがこの番組で最初に取材した映像だったのですが、そこで私自身は、あのデモが明らかにおかしいというか、違和感を覚えて、そのデモの現場にいたんです。ところがそのデモを見ていた一般の大阪の人たちに何人かインタビューした際、“このデモおかしいですよ”とか“このデモ変ですよ”という声が当然聞けると思ったんですが…。たった一人プラカードを持って抗議している人が“このデモはおかしい”と言っていました。ほかの人はほぼ言わなかったですね。

(不確かなインターネット情報を) 否定する状況があれば、まだしも、いわば今の状況というのは政治家も(土人発言)を差別と断定できないなどと、デマまがいのインターネット情報をさらにおおるような発言をしているので、その点で政治の世界もすごく深刻だと思います。

司会 ですから、(インターネットなどから入ってくる) さまざまな情報が普通の人々に刷り込まれてしまうという恐ろしさを感じることがあります。そして何かによって刷り込まれた情報が正しいか、正しくないのかは別にしてただ拡散して人々を洗脳していく風潮というのが何となくあるんでしょうね。

残り時間があと 30 分ぐらいになりました。各自皆さま方からご質問をいただきましたと思います。

<ドキュメンタリー番組で“ファクト”を決めるのは誰か>

出席者 東京の立教大キャンパスでの上映会(2017.7. 30)でトークショーが開かれましたが、こんな質問があったように記憶しています。

ファクトを決めるのは誰かという質問に対して、それを決める人は撮る側によってファクトが変わってくるとおっしゃいましたね。つまりこの番組ではファクトというのは、どういう形でお決めになったんですか。

齊加氏 それは取材する中で、どのファクトに光を当てるかというのは選択しているんですが。

出席者 アンチ反対派の声というのに対して、あなた自身が持っているファクトをぶつけて作り上げたものだと僕は思います。新聞でいろいろ取り上げられて(今問題になっている)MXの「ニュース女子」を見ました。これはB級のバラエティー番組です。しかも東京ローカルで視聴者も少ない。なぜこんな番組に真剣に突っかかっているのか。突っかかってもしょうがないと感じたんですが、そこはどうですか。

齊加氏 沖縄のデマ、言説についてもインターネット上で流れている分には、それはやむを得ないなと思っていました。ところが、いみじくもMXは放送法で定められた放送局であって、放送法では「報道は事実をまげないですること」事実を伝えるという規定があります((第4条1項3号)。ですから法律上、MXが流したことは「事実」ということになってしまいます。そこが私自身は放送に30年近く携わっていて、放送というのはどうあってほしい、先輩からさまざま受け継いできたことを、ささやかですが積み上げてきたという自負があって、放送の仲間はみんなそうだと信じていた気持ちがずっとあったんですね。気に入らない番組はいくつもありましたが、放送、報道というのはみんなに事実を伝える役割を果たしているんだと。

出席者 「ニュース女子」をご覧になって、あれはいい加減とおっしゃるなら、僕はいい加減と思うんだけど、あれは認めていませんが、真実を出しているところもいくつかある。

齊加氏 全くすべてがウソだとは申し上げていない。私は番組でファクトを積み上げて真実に迫ろうとしていますが、私が提示した真実が360度、どこから見ても100%すべての人にとって真実かどうかということまでは自信がありません。それで百歩譲って「ニュース女子」(の取材スタッフ)が、現場に行って儀保さんなり、泰さんなり、(基地建設反対で)座り込んでいる人たちに“なぜそこまでするんですか”ときっちり聞いて、その声を番組の中に盛り込んでいけば対応が違ったと思います。バラエティー番組だったら何をやってもいいんでしょうか。

司会 ほかにご質問がありましたら。別の方からどうぞ。

出席者 インターネットじゃなくて、地上波の情報番組（関西）でも有名なフリーアナウンサーが平然と沖縄の基地反対運動に対して“暴力的な行動をしている”とか“そういう反対派の人は本土から来ている”と沖縄で聞いた話として批判的に伝えていました。

司会 このような状況を、元放送局経営者としてどう思われますか。

<地道なドキュメンタリー制作 存在意義大きい>

出席者 こういうドキュメンタリーではある部分、これが正しいのか、真実であるのかと感ずるところがあるんです。というのは、例えば“土人発言”の中で松井大阪府知事が（基地反対運動の人たちのことを）“実はあれは雇われているんだ”という話をして、大阪府警の機動隊は一生懸命、国のためにやっているのに批判的なことを言われたら、それに対する反発としての発言が、よくないが、出てしまう。それをワイドショーで取り上げる。主婦も含めて高齢者も、面白い話題のところでも高い関心を持ちます。そのワイドショーでフェイクニュースともとれる情報がどう広がっていくか、扱いによっては問題じゃないかと最近思っているんです。実際に沖縄の基地反対運動に参加している人たちというのは、過激に反対運動していないだろうから、それをリードしながらやっている人が他にいるんだという風に見てしまう。

しかし今回の番組では基地反対運動の素顔という視点で作られた。当然自分たちの土地を接収され、そこが危険なオスプレイのヘリポートになる。ところが政府はそれに対して何も言えない。（アメリカ側の）言いなりになっている。ましてや北朝鮮の問題があつて、日本を守っていくためには当たり前じゃないかというような方向にどんどん向かっていく。沖縄にアメリカ軍の基地が集中している(70%を占める)ことに沖縄の人々はどのように感じているのか。

基地反対運動の素顔という点では、僕はある部分見えたんだろうと思っています。というのも、なぜ早朝から畑仕事をしているのかということが、導入部の映像からよく理解できましたし、やっぱりこうした地道な取り組みによって作られたドキュメンタリーというのは、本当に真実を追求していくという点で存在意義があると感じました。

齊加氏 確かに午後の時間帯に放送されているワイドショー（情報番組）の視聴率と深夜の時間帯に放送されるドキュメンタリーの視聴率とでは、どちらが高いかというのと、ワイドショーの視聴率のほうが明らかに高いわけですから、その情報に触れる人のほうが 多いということが言えます。

実際私も、番組には登場しませんでした。コメントーター・弁護士を取材したのは、身近な友だちから“土曜日朝のバラエティー番組で見たんだけど、基地反対派って、沖縄の人じゃないんだって”と聞かされたのがきっかけでした。

司会 インターネットの関係で現役時代、悩まれたことはありませんでしたか。

<ネットの“言論”空間 その影響力広がる>

出席者 そうですね、今回斉加さんの番組はネットの言論空間というか、その影響が

どんどん大きくなってきているということに危機感をもって作られている。

以前、MBSのドキュメンタリーでトヨタのサービス残業の問題を取り上げられていましたが、僕のところだったら愛知まで行って、しかもトヨタというスポンサーのこともあり、やれるかなと思いました。

今回の（舞台は）沖縄なんですね。そこに行って取材された。これは大阪府警の「土人発言」の問題があって接点はあるんですね。それ以外では東日本大震災の問題でも現地に行かれて制作された。MBSの報道局の人たちの関心の持ち方というのは常に日本中を見ていて、世界における日本の変化みたいなところを問題意識として持っているところが、実にすばらしい、僕も辻さんと一緒に「地方の時代」映像祭で審査に関わっているんですが、MBSの作品が必ず最終審査に残るんです。そこにMBSのドキュメンタリーの伝統的なものが引き継がれているように思います。

今回の斉加さんが作られた作品では、インターネット上で(基地反対運動が)ゆがめられた形で伝えられている実態を丹念に取材し、検証していますが、民放の経営者も営業的な面からこのネット空間の影響力の大きさについては当然関心を持っております。

今のところ地上波放送はこの2、3年、前年を割り込まないで頑張っています。テレビは約2兆円、ネット広告は1兆円台へ。ネットというのは商売上無視できない存在になってきています。

それはそうなんですが、ドキュメンタリーが深夜の時間帯で数パーセント、4、5%を維持し頑張っている影響力とネットの影響力を比べると、ここにフェイク的なものがまかり通ってくるなか、やはり王道のドキュメンタリーの作品でそれが話題になることは大切です。東海テレビの作品のように地上波で放送したドキュメンタリー作品を劇場公開して、多くの人の胸にしみ込んでいくようなものになるといった影響力。これこそ王道の本質だと思います。

そういう意味で言うと、今回の斉加さんの作品というのは、失礼な言い方かもしれませんが、非常によくできていて、感動しました。

この作品の中では二人の人物、泰 真実さんと 儀 保 昇さんを中心的に取り上げて

いて、(番組の)最後の抗議集会のシーンで儀保さんが「“非暴力・不服従・直接行動”
によって闘い続けましょう」と簡潔に訴える。それを聴衆の一人として見ていた泰
さんは「必死なんですよ」とつぶやく。沖縄におけるリーダーとそれを支える人た
ちを、こういった構図の中でおさめたところが見事でした。

司会 本当に素朴な人たちが素朴な運動をやっているんだなという気がしました。
斉加さん、このテーマをライフワークになさりたいお気持ちがありますか。

斉加氏 あと一作は沖縄で作りたいと思っています。来年は名護市長選挙もありますし、
沖縄県知事選挙もあります。こういう政治状況の中で沖縄にはいろんなことが起
こってくると思いますので、もう一作は必ず作りたいと思います。

司会 この選挙の結果によっては大きな変化が起きるかもしれませんね。
今日は毎日放送の斉加尚代さんに来ていただきました。
本当に濃密な時間を過ごさせていただきました。

以上